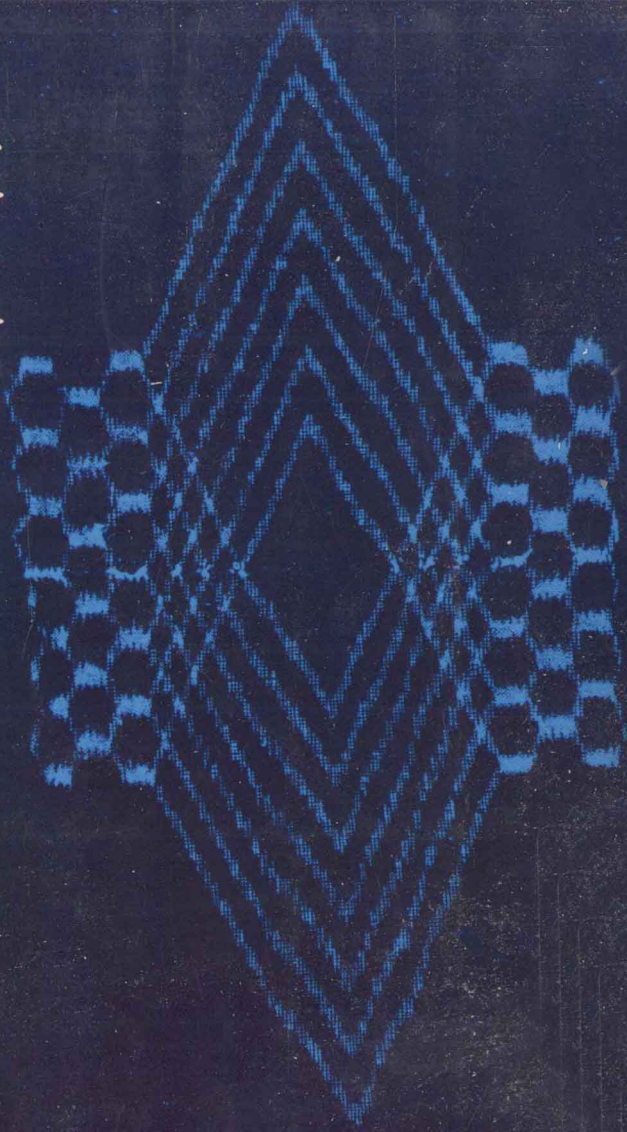
# 日本人のこころ

谷川徹三



谷川徹三（たにかわ　てつぞう）
1895年生まれ。京都帝国大学文学部哲学科を卒業。法政大学文学部教授，同大文学部部長，同大総長を歴任。著書に，『感傷と反省』『生の哲学』『哲学的文学』『宮沢賢治の世界』『人・文化・宗教』『芸術の運命』など多数。

日本人のこころ
谷川徹三

昭和51年11月10日　第1刷発行
昭和63年6月10日　第3刷発行

発行者　加藤勝久
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2－12－21 〒112-01
電話・東京(03)945－1111(大代表)
装　幀　蟹江征治
印　刷　株式会社廣済堂
製　本　株式会社国宝社

© Tetsuzō Tanikawa 1976
Printed in Japan
落丁本・乱丁本は，小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えします。
なお，この本についてのお問い合わせは学術文庫編集部宛にお願いいたします。

ISBN4-06-158079-5 (1)　　(庫術)

# 日本人のこころ

谷川　徹三

講談社学術文庫

# 目次

I
日本人のこころ……10
再説日本人のこころ……28
II
覚書……50
民族と伝統との問題……67
ヒューマニズムについて……80
新しい日本文化……88
相撲……95
III
新文学への道……110

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

文学と民衆……131
政治の文学支配について……146
国語の諸問題……161
哲学と文学……173
文芸評論家と社会評論家……183
ヴァレリの一句をめぐって……194
思想統制と風俗統制……205
無題……215

## Ⅳ

刀剣用語……222
花吹雪……226
日本民芸館……230
蛙……233
アンフィトリオン……239
犬に縁のある話……244
感覚の文化……251

V

知識層の文化的無地盤性について……260
日本語と日本精神……273
後記……288
解説……古谷綱武……290

# 日本人のこころ

I

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

# 日本人のこころ

## 外人のための講演

日本人の心は日本人の生活をはなれて理解することはできません。そして生活は永い間の伝統をはなれて理解することはできません。しかしこういう短い時間で日本の文化の今日までの由来を話すわけにはいきませんから、それをある程度までみなさんが御存じのこととして私はただ一つの面から問題を取り上げたい。私はむしろささやかなことを問題にしていきたい。そのささやかなことがいっそう大きい聯関を解きほぐす手引きになればよいと思っていますが、それができますかどうですか。

ラフカディオ・ハーンは「日本人の微笑」という私どもにも大変興味のある一文で、日本人に特有の微笑について語っていますが、その中で、その微笑を理解するためには、日本の古い、自然の民衆生活に入ることができなければならないと説いています。そしてその際、日本では高等教育は東西人の感情の融和をかえって妨げている、西洋風に高い教育を受ければ受けるほど、その日本人は心理的に自分たちと遠くなっていくと言っております。さらに心持の上では日本の子供の方が日本の数学者よりも、農夫の方が政治家よりも、はるかに自

分たちに近い、全く近代化した日本人の最も高い階級と西洋の思想家との間には知的共感らしいものは成立しないと言っております。ここに子供をもってきたのはハーンの詩人気質で、どこの国の人でも他の国人と親しむには子供がいちばんよいでしょうが、しかしこれらの言葉はそれ以上に私たちを今日もなお反省させるものを含んでおります。

私はこう解釈いたします。西洋風の文明がはいってくる以前日本には立派な様式をもった教養の体系があった。そういう教養の体系は西洋風の教養の体系とは精神と形態とを異にしていても、とにかく立派な様式をもっていたから、西洋の教養ある人士もそれを理解しそれを尊重することができた。それについてはフランシスコ・シャビエルの書簡を初めとして十六世紀以来日本へ来た諸外人の日本人について記すところを見ればわかる。シャビエルが日本へ着いて、二ヵ月程の後、その当時印度にあったジェスイットの布教本部に差し出した一五四九年十一月十一日附のよく知られている書簡には、日本人がいかに善良で正直で親切で名誉を重んずる国民であるか、またいかに勤勉で勇気があるか、総じて日本にいかに立派な教養の体系があるかを語っております。そしてなお後の書簡でも、日本人がいかに学問を好み、よく道理をわきまえているか、彼らが真理と信ずるものにはいかに喜んで従うかを言い送っております。

実際その当時の日本の文化は全体としてヨーロッパの文化に劣っていなかったでしょう。シャビエルもミヤコの壮麗について、当時戸数が十万を下らず世界に比類のない大都会であ

ると言いやっております。それは彼自身ミヤコへ行く前に聞き伝えで言いやったのでありますが、実際に当時及びそれからしばらく後の京都や大阪ほどの大都会は当時の十六世紀のヨーロッパにはあまりなかったでしょう。当時のヨーロッパにはすでに自然科学が相当の発達をしておりました。それでシャビエルも、日本人は学問を好み他の国の人々よりよく道理に通じているけれども、まだ地球の球体であることやその運行のことを知るものがなかったから、その理由やその他天文に関することを説明したところ彼らは喜んでこれを聴いたと言っております。

しかしそのように自然科学というものこそ当時の日本の学問にはありませんでしたけれど、技術方面では今日遺っている城などを見てもわかるように随分発達していましたし、十七世紀の終わりには、独特な仕方で西洋の数学の微積分にあたるものをやったような数学者も出たのであります。つまりそのくらい一般文化の程度は高かったのでありまして、従って、そこに教養の立派な体系の存在していたことには何の不思議もありません。

しかるに明治以来急激に西欧の文物をとり入れるようになってから、そういう教養の体系はだんだん形がくずれてきた。それはそういう教養の体系が新しい生活の諸条件に適合しなくなったからでもありますが、同時にまた西洋移入の学問、風俗、礼式に押しのけられていったからでもあります。しかし学問でも歴史と伝統とに密接な関聯をもつモーラル・サイエンセスあるいはソーシャル・サイエンセスの方面では、そういうものに依存すること少ない

自然科学の方面とちがっていろいろな混乱が起こったように、一般教養の方面ではいっそう大きな混乱が起こりました。そういう混乱は西洋人の眼から見れば、一方で自分たちの習俗や教養のきわめて浅薄で表面的なあるいはいびつな真似事にすぎぬとともに、他方では昔美しい形式として存在していたものの破壊と見えたのは自然のことでありました。そこをハーンのような人が反撥したのは当然でしょう。

ハーンは一方ではどんなに自分たちとちがった心の動きにも素朴で真情にあふれたものにはすぐ感動するとともに、他方秀れた感覚と教養とをもつ詩人として美しい形式に心惹かれる人なので、昔ながらの――永い間に日本人の心のしみこんだ、自然に美しい様式にまでなっているものに惹かれただけそれだけ西洋文物の移入による新しい混乱を嫌悪したのでしょう。実際明治以来日本に渡来した外人たちは教養のある人たちほどその混乱を強く感じそして反撥しているようです。ほとんどすべての日本に来る漫遊客が、日本人のキモノの美しさを讃美し、そういう美しいキモノをどうして洋服にかえるかと言っているのは、今言ったような事情を背景にした今日の日本の文化全体に対する外人の見解のいわば象徴的表現になっております。

しかし近代産業の発展と社会生活の諸変化とが日本人にキモノを脱がせたのです。つまり生活の必要が趣味を犠牲にしたのです。多くの人はそれを必ずしも意識してはいません。しかし結局そういうことになります。趣味の眼から非難すべきことも生活の必要からは非難で

きません。ですから日本人はこの後ももっともっと「キモノ」を脱いでいくでしょう。今日われわれが着ているような着物の形はまだせいぜい三百年の歴史しかもっていません。今日のキモノの形はむしろ江戸時代のデカダンスの文化の中で今日のような洗練に達したものです。それより以前にはもっとちがった形のキモノをわれわれは着ていました。今日の洋服の形にもっとずっと近い形が一般人の服装であった時代もありました。ですからこれから後にも日本人のキモノの形はもっと変わったものになるでしょう。その点われわれはつねに新しい生活に適応していくでしょう。

しかしそれにもかかわらずみなさん外国の方たちの感ぜられるところは正しいので、それはつまり今日の日本の文化がたしかな様式をもっていないということです。それをもっともよく示しているのは今日の日本の都会の街路です。これくらい雑然とした光景というものは他ではあまり見られないでしょう。こういう混乱を今日も日本が不断に進歩していることの証拠として見ることができるにしても、だからと言ってそれを自慢することはできないでしょう。

かつても日本は印度や支那の文化をいろいろ受けてきました。しかしそれを立派に消化して独自の様式をつくってきました。建築にしても、彫刻にしても、絵画にしても、学問にしても、宗教にしても、とにかくそこに独自な日本的なものが見られるという意味で、日本の文化はシュペングラーが言っているような「月光文明」――他の文化の反映としてのみ存在する文明ではありません。印度や支那の文化を自分のものとしたプロセスのうちに日本人の

独創性と独自性とが見られます。これはイコノグラフィーの厳格な規定によってそういう独創性を示す余地がなく、事実最も独自性の少ないものと考えられている仏像仏画の類についても言いえられます。ここにも古くから日本的表現というべきものがちゃんと存在しているのです。しかしそのような文化の様式は過去の日本にはあったけれど現在の日本にはない。日本人は西欧文明をまだ印度や支那の文明のようには十分自分のものとしておりません。その点で現代の日本人は一つのデュアリズムの中にある。すなわち、過去において立派な様式をもっていたけれど現在においてはますます力を失おうとする伝統の文化と、現在において新時代の中に力強く生きはたらいているがまだたしかな伝統の地盤をもたない、従って様式をもたない、西洋移入の文化とのデュアリズムの中に。

和辻哲郎氏はこういう問題について、日本文化の重要な特質を重層性という言葉で言いあらわしています。例えば日本の農村は今日でもその宗教的中心として鎮守の社と仏教寺院とをもっているのが普通です。鎮守の社は日本の古代からの民族宗教の上に立つものであり、仏教寺院はもちろん世界宗教としての仏教の信仰に基づくものであります。日本では歴史時代にはいって間もなく仏教が渡来し、それはすぐさまはげしい勢いをもって全国に広がりました。天皇が自ら「三宝の奴」とおおせられたことさえありました。三宝とは、仏、法、僧の三者を意味しすなわち仏教そのものをさすのです。仏教をはなれて日本文化を考えることはできません。日本の中世を通じて仏教はちょうどヨーロッパの中世におけるキリスト教の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton